

昭和五十一年五月二十一日 〓講演

「明日への提言」

只今ご紹介をいただきました佐橋でありませぬ。ご紹介にありましたように、私は役人を辞めてまる十年になります。それから余暇開発センターへは四年ばかり前からお手伝いに行っておりませんが、実質は浪人のようなもので、自分の好きな時に本を読んで物を考えたり、時々書いたりという優雅な生活しております。そういう生活をしておりませぬと、あいつは暇だから一つ呼び出して話をさせてみようという粋狂な方が案外多いのでありますが、私は実は講演はあまり好きではないのであります。と申しますのは、皆さんが一体何を聞きたいのか、それに答えられるかどうか、皆さんの聞きたいことがわからなくて、その答えがうまく合うわけがないので、私は一方通行の話をするのが大変心苦しいのであります。私が変な話をする間、皆さんは拘束されて何か気が重い。書いたものならば読む気の無い人は読まなければよいので、むしろ書くほうが気分的に楽であります。今日は「未来への提言」という、非常に漠然

たる話であります。質問のきつかけといひませぬか、これを皆さんに用意していただくために、私の思いつくことを喋ってみたいと思ひます。私はさきほど言いましたように講演に出てくるのも大儀に思うぐらひですから、皆さんに話をするために何か考えてくるということはおおりませぬ。頭がよくないので、空で物を考えるということは得意ではありません。同じ所ばかりくるくる廻つていてちつとも進展しない。書けばある所まで書いて、又考えれば進みますので、書くほうが私自身には勉強になります。ところで、講演の原稿を書くということになれば、ちよつと喋るためには原稿用紙にして五十枚くらいになる。五十枚書くということになると大変で、小説家あたりで書き流す人は別として、われわれのように無い知恵をしぼつて書くというのはそうは参りませぬ。一日に十枚も書けたら、それは大変能率の上がつた時で、ときにはその半分も書けないのであります。皆さんもご承知の西田幾多郎先生も、四枚書けた

らそれは大変能率が上がったと申しておられたのを聞いたことがあります。松本清張などは工房といつて、相当の手足をもつて工場生産と同じようにいろいろの人の書いたものを纏めて清張というレッテルを貼る。全部が全部とはいひませぬが、そういうケースがなければ、あは書けない。だから私は原稿をもつにして話をしようという気は毛頭ないので、その場で思いついたもので話は次々と変わりますが、それは年中何か考えていたことで、偶然の思いつきでいい加減なことを申すのではありません。皆さん方がどのようにお感じになるかは別として、そういう私の生活態度でございませぬので、その積もりでお聞き置き願ひたい。寝られる方は寝てもちつともかまひませぬ。

私は通産省という所で三十年仕事を致しまして、いつてみれば産業政策、経済政策というのが私の専門分野といへばいいえるわけでありませぬ。ところが実は最近あまり興味がないのであります。皆さんはこれから大学を出られて社

余暇開発センター理事長 佐橋滋先生

会人になられるわけですが、今日おられる方はいろいろな大学のいろいろな科に学んでおられる方で、決して一様でないと思います。理科系の方でも文科系の方にも、私がこんなことを考えておるんだということを、ご披露申し上げたいと思います。私がなぜ経済に興味を持たなくなったかと申しますと、経済というのはご承知のように、現在の皆さんの生活と申しますか、或は職業人というのは殆ど経済だけで動いているのであります。経済というものが目的みたいになっていて。私は経済というものはそういうものではないと思っております。社会というものを別な表現をすれば、人間関係ということであり。人間関係というものを社会的用語で言えば、それは社会というものであります。人間関係にはいろいろあるわけでありまして、例えば友人もあれば、家族もあれば、地域社会、学校という社会、日本という社会、地球という社会もあります。このように社会というものはいろいろあるけれども、言ってみれば人間関係ということであり。人間関係にはいろいろの關係の在り方というのがある。人間同士のかかわりあいというものがいっぱいあるわけであり。経済というの、そのかわりあいの一つであります。人間同士のかかわりあいを考えてみれば、いろいろのパイプで繋がっている。経済というのもその一つのパイプ

に過ぎないのであります。経済は人間関係に奉仕するためにある、社会に奉仕するためにある。だから経済に人間が奉仕するのではなく、又そうあつてはならないと思つてあります。例えば、経済の中の一つの富というものの、富のために人間があるのではなくて、人間のために富が必要であるかどうかというだけのことです。私は現代の世の中で経済という一つの黄金律で振り廻されているのが現代の文明国家の現状ではないかと思つて。特に日本の場合には、その現れが顕著だと思つてあります。これは一つ反省してもらわなければならぬことでもあります。

私はどうして経済官庁へはいつたかと申しますと、大学時代に河合栄治郎という自由主義者が居られて、その人の社会政策という講義を聞いたのであります。私は大学時代のことなど殆ど忘れてしまひまして、何を覚えてるかと思つたところから困るのであります。当時、末弘厳太郎という法学部の教授が居りましたが、大学教育というものは全部忘れてしまつて、忘れたあとに何か残つておつたらそれが大学教育だと言われたことがあります。私は本当に綺麗さっぱり忘れてしまひまして、ただ一つ残つてゐることは、河合栄治郎先生の社会政策原理という勉強をしている時に、人間に人間らしい生活を保障する社会というのが現在まで私の頭

を去らないのであります。人間に人間らしい生活を保障する社会というのは、どういう社会なのか。その社会のため奉仕するのが自分の生涯の仕事ではないか、と実は思つたのであります。その時に人間に人間らしい生活を保障する社会というのはどうしたら可能なのかということを考えて、人間が或る程度の豊かさを持たないと、ドイツ語でいうメンシュリッヘス・レーベン (Menschliches Leben) という人間らしい生活というのは保障できないのではないかと。当時われわれが大学を出た頃は、日本は富んでいるとは決して申しかねる状態でしたが、先ず一つ経済の勉強をして産業を振興させることが、豊かさに繋がる人間らしい生活への前提条件ではないか、そういうことで経済官庁へはいつて勉強ともちろん仕事もしたつもりであります。私は昭和四十一年に役人をやめました。高度成長の一番盛んなところをやつておつたわけであり。ます。

ところで役人を辞めて十年になりますけれども、いつたい無条件に人間らしい生活と自分では言つてきたけれども、人間らしい生活とはいつたい何なのかということをも自分でもういっぺんとくと勉強してみたいということ、この十年間実はその勉強だけをしてゐるのであります。人間というものが分からずに人間らしいということが分かるわけがないのでありま

す。人間というものをもういっぺん見直してみ、何が人間なのかということは今勉強している。これが実は私が政界人にも財界人にもならないでいる本当の理由であります。私はこれから先何年生きるかわかりませんが、何とか自分の納得のゆくまで勉強してみたいというのがこの十年間の私の気持ちでございます、その考えをまとめるよすがとして本を読んでいるのであります。余談であります、皆さん方は勉強するとか学問をするということは、言ってみれば疑って考えることが一番大事だと私は思うのであります。先程も言いましたように、私は大学の勉強などは本当に忘れてしまつて思い出せないであります。ところが現在自分で勉強しておりますと、少なくとも大学時代よりは頭の中へはいり具合が非常によいのであります。この齡になつて学生時代より頭がよくなつたなどとは金輪際ないと思ひますが、これはまさに錯覚でしょうが、そう思ふというのはどういうことかと言ひますと、好きでやつてゐるということと、好きでやつてゐる。大学の時は就職もしなければならぬし、私のように田舎から出て来ますと成績もまあまあでない就職も出来ないということで、卒業するために勉強をする。面白いとか面白くないとかいうのではなくて、若干苦役みたいなようで一生涯勉強した積もりであつたけれど

も、何も残つていない。ところが、現在は好きでやつてゐる、面白いからやつてゐる、自分でない知恵をしぼつて考えて本を読む、これが面白い。本というものは、何冊読んだとか、山ほど読んだというのは大したことはない。本を読むというのは、この本を一つのよすがにして考へる、例へば、経済の本を読んでおつて経済のことを考へるかという、全然別なことに発想が行つてもちつともかまわない。私はむしろそのほうが大事だと思う。私は考えずに本を読むのだったら読まないほうがよい。又おかしな先入観をもつて本を読むならこれまた読まない方がよいと思う。自分で考へながら読む、読みながら考へるということが、一番大事な態度ではないかと思ひます。そういうことで私は朝十時頃から夕七時頃まで本を読むことがありますが、皆さんもご承知のように、本というものはどんなに頑張つても十時間、十二時間も一生懸命になつて読んでも頭の中へはいつて来ない。人間の注意力というものはそんなに集中力があるものでないのであります。

人間というものは非常に複雑な動物でありまして、地球上に生存する動物というものは、環境のリズムによつて生きてゐるものであります。同時に自分の固有のリズムというものを持つており、このリズムが狂うと、大體碌なこととはない、身体のリズムが狂つたら、それは病

気だということになります。勉強だつてそんなに集中できるものではありません。皆さん方が試験勉強だというとき、無理矢理やられるのは、一日こつきりとか一日こつきり或は一週間こつきりだとかで、それはやれますけれども、これをずうつと一年中続けるなどということは、とても出来ない相談でありますし、それをやったら恐らく皆さん方の身体は駄目になつてしまふと思ひます。だから自分のリズムを最も効率よく使うこととあります。余談でありますけれども、私は本を読むだけではなしに、何にでも興味を持つてやつております。私の余技はちよつと口幅つたいようであります。何でも三段だと自ら称しております。例へば酒を飲むのでも三段級の飲み方であり、歌を歌つても三段級であると、自ら普通のレベルより少し強いということとあります。柔道をやらせればそれは三段、剣道をやらせてもそれは三段である。ところで実際に段のあるものだけでも私は現在三十段以上あつて、それに自称のものを入れると五く六十段くらいはあります。私は中学まで相撲をとつておまして、高等学校から柔道をやり、兵隊に参りまして剣道を、これは義務的にやらされました。私の三段というのを、腕をみたいというなら、私は何時でもお相手します。そう簡単には負けないと思つております。実は合気道も役人を辞めて五十二歳から

はじめて三年間に三段になりましたけれども、現在は太極拳と申しまして支那の武道をやっております。今、美容体操みたいな太極拳というのが流行っておりますけれども、私のやっているのは中国の武道としての太極拳であります。八年間週二回教わっているが、千数百年間中国人が考えに考え抜いた武道でありまして非常に合理的であり、いわゆる生きものとしての人間が戦う、人間の術としては最高のものではないかと考えて八年間一生懸命やっておりますが、これは段がないので何処まで行つたか分かりませんが、相当なものではないかと自分では思っております。

これらのものに全部通ずることは、身体がリラックスしていなければいけないということでもあります。柔道の自然体でも、剣道の正眼の構えでもリラックスしてなければ駄目なんです。例えば、禅でいえば、身体が全くゆつたりとして背筋が伸びているということで、禅の言葉でいえば「脊梁骨を樹立する」ということ、これは背骨をまっすぐにすること、ゆつたりとしているということ、つまりちよつと参考までに申し上げますが、これは非常に大事なことで、皆さんが勉強をされる時に好きな格好をして本を読んでいると頭にはいりやすいついていたら大間違いで、きちんとした姿勢で力が全部抜けているという状態が身体

でも動きやすいし、頭も最も働く状態です。そういう状態とはどういうことになるか、簡単に申しあげますと、呼吸の仕方なんです。皆さん方は案外呼吸の勉強というのをあまりしないんですが、呼吸というものは生まれた時から自然に出来るのであって、これを日本の言葉では息をすると言います。これは生きることと全く同じなんです。食わなくても人間は死なない。眠らなくても人間は簡単には死なない。ところが呼吸は止めたらずぐ死ぬ。これはもう分かりきった話であります。この呼吸というのが生きる上で、力を出す上でどのくらい大事かということ、呼吸と吐くこと、吸うこと、呼ぶこと、相撲で阿吽の呼吸が合うとか合わないとかいうが、阿吽というのは呼吸と全く同じで、「阿」とは吐くことで、「吽」とは吸うことなんです。阿吽の呼吸を合わせるということは、人間が吐く息と吸う息の状況を合わせるということ、何時でも吐き出せる態勢になつた時に軍配を引くことになつている。ということは、息を吐くということが非常に大事なので、呼吸というのは吐くという字が先にある。うまく吐けばうまく吸える。吸う時は筋肉が硬直する、吐く時は筋肉がリラックスする。だから吐く態勢が大事なのです。相撲でよく呼吸が合わない、片方が吐く態勢にあつて、片方が吸う態勢でぶ

つかつた場合、それは吸いかけたほうが負けるに決まつている。吸う時は筋肉が硬直するのでその時は弱い。その証拠に手を伸ばしてごらん下さい。吐きながらだと伸びるが、吸いながら伸ばすのは大変なんです。私が今喋っておりますが、喋ると言うことは息を吐いていることで、吸いながら物は言えない。剣道でもメーンと言うのは息を吐きながら打つということ、小手でも胴でも同じで、メーンと言うよりも、ホーツと吐きながら打つ、これで人間が斬れる。柔道でも自然体が大事だということも、身体力が抜けている状態で、身体がリラックスして力が出るときです。剣道で面と向かつた場合、相手の息の状態を見破つたほうが勝なんです。ピンポンの場合でも、サーブを打つ時に相手が息を吸いかけた時にレシーブを入れたら勝てるに決つております。百米走を走るのであって同じです。ヨイという時に息を吸つて、ドーンという時に吐きながら走る、五十メートルぐらいは一気に駆け抜けるでしょう。例えば、マラソンの宇佐美(彰朗)なんかもそうです。彼はいつぱん駄目になつてから呼吸法と技術を自分なりに考えて、又カムバックしたんです。健康法でも同じです。私は今トリム運動という健康法をやっているけれども、これなんかもうです。健康というのは息の吸い方によつて酸素を多く吸い入れるか、入れないかということ

なんです。だから酸素がうまく吸えない人は弱いんです。身体の中というのは、これ以上精密な化学工場はないといわれるぐらい非常に精密に出来ている。本当に地球上では考えられないほど精密に出来ている。ところで機械であるうと人間であろうと、エネルギーを出すというのは燃焼、燃焼の場合には酸素がいるということとは皆さんご承知のとおりであります。だから上手に呼吸をして酸素をたくさん吸入する。これは酸素を吸って何百億という細胞の末端まで酸素を送り届けることであり、酸素の吸い方、呼吸の仕方が問題なのです。この呼吸の仕方は運動をすることによって、案外うまく出来るものです。又余談になりますが、皆さん方がこれから勉強をされる場合、ちよつと呼吸を考えるのと面白いほど頭の中へはいってくる。例えば、禅で悟りということがいわれますが、やられた方はすぐ分かると思いますが、ゆつたりとしてまず呼吸を整える。これは息法というもので、呼吸だけで先ず没頭してしまふ。他のことは何も考えない。呼吸だけを考えている。やがて呼吸も考えなくなる状態、ここで悟れるのか悟れないかである。皆さん方は勉強しないと知恵が出ないと思つているがとんでもないことで、人間というものは何も教わらなくても、大変な知恵が出てくる。私は時々考えるんですけれども、明治維新の吉田松陰は三十一歳で、橋本左内は

二十六歳で死んでいる。この人たちは今私らが読んでもなるほど立派なことを考えていると思つてすけれども、それでは松陰や左内がいくら威張つても私の百分の一も本は読んでいないと思つてあります。当時はそれだけ本がなかった。皆さん方は不幸にもくだらない情報がいっぱい入つてくる。本もつまらない本がいっぱい出て、何を讀んでよいか分からない。讀むとすれば漫画本的な読み方をされる。そんなものは讀まないほうがよい。彼らは限られた本をとことん讀んで、本当に自分の血となり肉となるような読み方をして居る。だからどんな問題に対処しても、その勉強というか考え方というのが生きている。だからあれだけ後世に残るようなことができたわけでありませう。日本だけでなく、ギリシャ時代にだってそんなに大変な本はなかった。いわゆる伝承とかいい伝えというものがあるだけで、大した本などあるわけがなかった。後にまたグーテンベルヒ(グーテンベルク J. G. Gutenberg)の活字というものが出来て来て以来、本が多く読めるようになったもので、それでも昔のものは何百部も売れたら、それは今でいうベストセラーで、やつぱり大して讀む本はなかった。今から二千四五百年前の連中よりも現在の人間が劣つて居るとか退化しているのだとは私は思わない。人間というものはここ何十万年間同じである。だから彼ら

が私たちより優れてもおられない。ただわれわれは環境が悪くて情報に振り廻され自ら考える力を環境的に喪失しはじめて居る。これが大変な問題で、私の言いたい未来への提言ということも実は人間がおかしくなりつつあるということをいいたいのであります。

私は先程人間の勉強をはじめたといひましたけれども、現在人間というものが分かつたようで分からない。皆さん方も人間だけれども、自分で人間というものがお分かりになつたと思つておられたら、それはあまり勉強されないか、分かつたような積もりになつておられるだけであります。特に現在の学問というのはいろに細分化されております。例えば、経済学一つをとつてみても、経済学が出たのは恐らくスミス以来のことだと思ひますが、この経済学というものが学問の形をとつてから、ご承知のようにスミスの「国富論」が二百年前に出たのであります。その後現在の数量経済学、近代経済学というのは学問として大変進んだことになつて居るわけでありませうが、これが實際に進んだのかどうかを皆さん方がお考えになりますか、これは進んではおらないのであります。経済学、或いは政治学でも社会学でも心理学でも何でも同じでありますが、人間を相手とする学問というものが、いわゆるサイエンスの名のもとに自然科学に精緻を求めれば求めるほど

その学問というものは少しずつおかしくなつて行くわけでありませう。ということは人文科学ということもありますが、人間に関する学問は人間というものが前提であります。その前提とする人間というものが何であるか、それが分からずに人間を前提にしている。経済学というもの、人間は利潤動機で動くものだというふうにして決めてあるわけでありませう。例えば、安いもののほうへ消費力というものが動くんだということ、高価なもの、高価なもののほうへ動くということになれば、今の経済学は潰れてしまふ。人間というものは利潤動機で需要というものが集まつてくるんだ。これは消費の性質が違つてくれば別ですが、そういうふうにして人間の性癖というものを前提としていくわけでありませう。ところが人間というものはそのとおりに動かないのであります。そういう欲求もないではないが、大部分の人は利潤動機で動く人が多いといふことはいへませうけれども、この利潤動機という問題は現代の資本主義が發生して以來の問題であります。資本主義をどういふふうで定義づけるかは別として、当時一番進んでいたイギリスからいへば、重農主義、重商主義として、その頃から身分制度が廃棄されて形式的な自由で戦い、利潤を求めるようになり、利潤というものが大変なウエートを占めるようになって現在に至つておるわけでありませう。それ

前には利潤動機というものはなかつた。皆さん原始的な人間或いは農業を主体とする人間、これも参考までに申しますが、今の資本主義社会というものが必然的な進化過程で、資本主義から社会主義になるといふようなことはない。同時にそういう考え方は、間違いを起こすものになると思ふ。経済学的にもつと正確に定義づけすれば、それは農業社会から工業社会へ移るといふことであります。資本主義とか社会主義だといふことは、その生産形態の所有関係、管理形態がどうだといふだけのことであります。社会主義といふものは、それは社会の管理形態といふことです、社会が管理する、国家が管理する。資本主義といふのは、企業を個人に任せる。今日どちらも厳格な社会主義、資本主義といふものはないのだけれども、これが混交しているわけ、所有関係、管理関係の問題であつて、経済学的に一番興味のあるところであります。経済の發展を考へてみますと、われわれ人間の祖先は何十萬年前には狩猟民族であり、採集民族で、草や木の実や根っこなどを採つて食ひ、象や兎や猪などを追ひ廻して食つておつた。雑談になりますが、人間は肉食になつてから地球上の何処にでも住めるようになった。他の動物はそうは行かない、自然の条件に制約されるからであります。例えばライオンが急に肉食に変わるということはないのであります。そういう

ことで人間は世界中に広がつた。また余談になりますが、皆さま方の中には理科系統、文科系統の者もおられますが、人間というものが地球上の何処にでも發生したとお考えの方もいるでしょう。私は恐らく或る一個所で人間という種が發生し、肉食と知恵でだんだん世界中に広がつたのであると思ひます。これはコルトランドといふオランダの生物学者であり地理学者の説で、私がいろいろ讀んだ本の中で一番正確ではないかと思ひます。コルトランドは、東アフリカで人間といふものは發生したと考へております。ご承知のようにチンパンジー或いはゴリラが人間になる。それは西アフリカと東アフリカが切れて離れた時がある。古代地理学の説で、今でも痕跡が残つているナイル川から南アに及ぶ線（大地溝帯）は、川と湖沼地帯で隔てられてゐる。だから西と東で同じ種が勝手に行き来できなかつた時代が何十萬年前にあつた。チンパンジーといふのは、西アフリカにしかない。人間はチンパンジーが地殻變動によつて突然變異した。猿はあまり泳ぎが得意でないで、東アフリカのチンパンジーは何十萬年の間に人間になつた。高等動物といふものが突然變異によつて他のものになるときは、地理的に隔離されていて、しかも大量に變種が發生しなければ、種といふものは進化しない。カモメのジョナサンのように、一匹だけお

かしのカモメが現れても駄目なんです。これまた参考までに申しあげますが、樹上生活から人間が地上へ降りたわけですが、皆さん動物学で教わったと思いますが、人間が他の哺乳動物の中で、一番違う点は何か、何所が違うかというところ、ホモ・サピエンスだと考えるところが違う。ホモ・ファールベル、人間は道具を使う、そこが違う。そんなことはない、他の動物だって、道具を使うものもある。人間が他の動物と違うところは、二本の足で立つことだ。二本足で立つようになった時に、人間というものは決定的に違ってきた。皆さんちよつと考えてごらん下さい。二本足で立つて頭が小さかったらとてもバランスがとれるものでない、人間は二本足で立つてから、頭が大きくなった。他の動物と違うところは、身体に比較して頭が大きいということ。二本足だから、どんなに重いものでも脊椎の上に乗る。そこで、皆さん方に運動をしろということをお願いしたい。運動をして脳に振動を与えることは、脳の栄養に非常に大事なことです。これは医者が必要そう言います。人間は横に寝かせて脳に振動を与えなかったら、数年で駄目になる。身体よりも先に脳が駄目になる。人間は歩きながら脳に振動を与えているからよいのである。チンパンジーでも熊でも犬でも立つことはできるが、それはやれるだけで、いざ鎌倉という時に二本足で逃げるかというと、

決してそうでない。皆さんは健康でなければならぬ。俺は頭がよいから身体なんかどうでもというわけには行かない。身体の弱い奴にまともな仕事などできる筈がない。頭脳労働者ほど身体が丈夫でなければならぬのであります。さつき経済の話をしておいたのだけれども、人間というものは非常に複雑であつて、人間の或る部分だけをとりてそれを前提として構成された学問というものは、学問として精密であればあるほど現実からは遊離するということを先ず言いたい。経済学でモデルを使つたり、数式を使つたり、それが駄目だとはいいませんが、そういう勉強が現実の経済を説明するのに何か役に立つかといえますと、役に立たないことが多い。だから先程言つたように、人間というものはそう簡単なものではない。例えば、皆さんも喫茶店へ行くことがあると思いますが、どのコーヒーが十円安いからといっても、その安いほうへ必ず行くかというと、そうではない。やはり行き慣れたとか、可愛い子ちゃんがいるとかで、十円や十五円高くてもそこへ行く。これは卑近な例ですが、人間というものは安ければそこへ行くというものでもない。人間の或る一つの性癖、そしてそれは人間全部に通ずるものでもないのにそれを前提として学問を成立させることは、大変間違つたものになる。現実と遊離したものになるということを知つて

使わなければ、大変なことになる。それは政治学でも何でもそうであります。人間というものの一面をみたり、一つの性癖をみて、これは人間全部にあるんだとお決めになられるところに間違いが起きる。皆さんは、非常に「合理的だ、理性的だ」というけれども、合理的、理性的といわれるものすら人間の感情が必ず入っている。例えば、マルキシズムというものを批判されるのも、嫌いだからと言う。だから嫌いだというのが前提にあつて、それで理論を組み立てる。その逆の場合も同じである。共産党が資本主義社会の悪口を言つても、マルクスものの考え方に禍いされて、本当の理性というものが働かない。どちら側も同じことです。皆さんが勉強される場合には、眼鏡をはずして自分でよく考えることが大切なんです。好きだ嫌いだということだけでは、判断を狂わせてしまふ。自分では大変合理的に理論が組み立てられたと思つても、俺は嫌いだというのが始めにあつたとすれば、その理論の組立てはどなた様にも通ずるといふものにはならないのであります。このように人間というものは面白い複雑なものなんです。例えば、ここに四百人居られるとして、同じ人間というのは金輪際ない。地球上に未来永劫、或は何百万年か何千万年か皆さんと同じ人間というものは出てこない。だから人間の個性が大事だとか、生命の尊重という

ことが出てくる。例えば、私や前川さんと全く同じ人が何人かおるとなったら、人間の稀少価値というものはないんだ。一人しかおらない、今後絶対出てこないのです。皆さん、指紋というのは世界中に一人として同じものがないから、犯罪の決め手になる。人間を覆っている皮の先の方のほんの一部分、これだけでもみんな違うという。いわんや血液や体液、それに精神的な面まであって、これはいろいろな環境や性癖、性格によって同じ教育を受けても違うのです。人間というものは、絶対に同じものは出てこないのです。例えば、血液型にはA型とB型とAB型及びO型しかないんだという人があったら、それは大間違いで、みんな違う。あの四型というのは、拒絶反応を起こす度合いが少ないというだけで、O型の人にO型の注射をすると拒絶反応を起こさないで、すぐに自分の血にするというだけのことであって、同じ血だと思っていれば大間違いです。医者に聞いてごらんさい、絶対に一人一人違うんです。皆さんでも同じ親から生まれたり、同じ学校を出たりすれば、非常によく似ているというものはあるが、弟と兄が或は親父が自分と同じかという、大違いであります。だから人間は、個人或は生命の尊重ということは、そこから出てくるのであって、取り替え自由だというのであったら、何も生命の尊重だとか個人

人の尊重だなど言う必要はないのであります。人間は取り替えのきかないもの、皆が違うという認識を持たなければならぬ。良い社会とか、先程言いました「人間らしい社会」というのは、個人の能力をフルに發揮できる社会であって、そのためにいろいろの装置を考えればよい。経済というのもその一つであります。今日の演題は「未来への提言」ということですが、既にもう現在のものの考え方を変えなければならぬ、政治でも経済でも、すべての点で従来の考え方で行けると思ったら大間違いで、もうそういう状況ではなくなってきた。経済を一つ例にとってみても、マルキシズム或いは古典経済学或いは近代経済学だって、資源というものには無尽蔵にあるという前提がある。だから地球の中から資源を取り出して、人間生活の利便に供するのが経済学だと思っている。ところが地球の資源は明瞭に有限であるということはロ―マ・クラブの報告を俟つまでもなく分かっている。しかもその有限性は、何億年もあるという有限とは違って、極めて短い間、物によっていろいろ差はありますが、皆さん方が生きていく間にも無くなる可能性がある物はいっぱいある。だから地球の資源というのは、無限ではなくて有限であり、しかもそれはかなり短い期間での有限である。そうしますと、経済学でも、先ず人間の面でも問題があるけれども、資源の

無限性というのが明瞭に崩れている。そんなものをベースにしてものを考えていったら、大変なことになる。と同時に、例えば、今の公害というものについても、今までは経済面で公害ということとは全然考えていなかった。皆さん方が経済学をやられる場合、外部経済、外部不経済の中でいろいろの問題がここ数年前から少々出て来る程度であって、外部経済という経済の外にある要素というものがどのくらい経済に逆に圧力をかけてくるかということが、これからの問題であります。公害というものは、言ってみれば地球の浄化力を信用しておったわけで、大気から吐き出すものを地球が綺麗に浄化してくれた。これが地球の浄化力というもので、水も大気もそうです。公害というのは、この地球の浄化力が限界にきたということであります。地球は無限に浄化してくれると思っておったところが、そうではなくて、地球はどうにも私の力では処理いたしかねますといった状態が公害という現象であります。これは二十世紀に入ってから現れたもので、昔は豊かであるとか豊かでないとかいっておっても、われわれが使うものは、廃棄すれば殆ど間違なく腐敗して土に還ったものです。水の中へほうり込めば、流していった普通の水の中へ還元されてしまふ物ばかりであった。例えば、皆さん方が着ておられるものだって、昔は有機物であった。木

綿は綿の花、麻は木の皮、草の葉であり、絹は蚕の糸、毛織物は羊の毛というふうには、みんな生き物から出来ていて、放棄すればもとの無機物に変わってしまう。だから地球は簡単に浄化出来た。ところが現在は化学繊維、合成繊維が多いので、これは元へは還らない。地球はそれを腐蝕させて土に還元出来なくて、いつまでも残る。有機水銀というふうなものも、浄化できないで残るから、大変なんです。空気も水もどうにもならないというのが、現在の状況であります。資源が有限で地球の浄化力が有限だということになれば、経済の在り方だって従来のように沢山地球から掘り出して、人類の生活の利便に供するというだけであってよいものだろうか。現代は昔より物的には豊かになっていることは事実であるが、物的豊かさだけでけりがつくものではない。心の豊かさが必要である。例えば、心理学用語でいう不充足感、不満足感というのがあつた。簡単な欲求は満足するだけ食つたらその瞬間に食欲は満足する。ところが豊かさというものは満足することがない。溜るほどもつと溜めたい、何時までたつても満足することがない。そういう欲求を一生懸命追い廻すことが人間にとってよいことかどうかということ、いつぱんよく考えなければならぬ問題であります。

私がさきほど言いました人間らしい生活に

ついて、本当に人間らしい生活とは一体何だろうかというの、そういう所へ現れてくるわけでありませう。人間の精神的な満足というのは、さきほどの物を食べたのと同じように、瞬間に満足感を覚えるのであります。が、銭儲けなどは私は興味を持ちません。綺麗なものを着たいという気にもならない。それよりは裸でもよいから、知恵を得る過程がどのくらい楽しいか、そういう楽しさに人間の欲求が置き変わつてくると、世の中は変わつてくると思つて。さきほどの生活の便利さを供給するということが本當によいことだろうか、しかもそれは、決してそれだけで満足することはないのに。それと同時に、全部関連する問題であるが、例えば、自動車、モーターゼーションというのが進む。それはそれで結構で、人間の行動範囲が非常に広がるし、また緊急な用事で早く行かなければならない時は、自動車もジェット機も必要でしょう。ところがちよつとした用事、例えば近所へ買物に行くのに自動車をかう、そういう便利さというの、果たして人間の生活にプラスになるだろうか。さきほど言つたように、人間には二本の足がある。これを使わなかつたら人間は駄目になるのは決まつている。それは絶対間違いない。便利だからといって自動車で乗る。自動車には自動車としての使い道がある。年中足の代わりをさせてやろうなどというのはとんでも

ないことであります。昔は個人の需要に対応して生産が出来ていた。今の高度成長経済というのは、メーカーが売れることを前提として造り、それを宣伝で売り込んでゆく。皆さんがこういうことをするためにこれが必要なんだという選択で造るのではない。メーカーが勝手に造つて、マスコミでどんどん売り込む。だから自主性のない人たちがその宣伝に振り廻されて物を買つていくわけで、それが人間生活に決してプラスにはならないのであります。寝ていながらテレビのチャンネルを廻す。そんな必要がどこにありますか。ますます人間が動かなくなれば、明瞭に退化する。だから今の無茶苦茶な高度消費経済というのは、何の意味もない。何の意味もないというのは言い過ぎかも知れませんが、もういつぱん反省してみないと大変なことになります。皆さんも薬というものを買ふことがあると思つて、決して薬を不用とは申しませんが、ちよつと今の薬を考へてごらん下さい。今の薬はほとんど化学製品です。本當に病氣になつた人だけ薬を売つたのでは、儲からない。健康な人に飲まされなければいけないんだ。本當は飲んでも飲まなくても大したことのない、食物で十分摂れるものを、集約されたエキスのように言つて。本當にわれわれが病氣になつて熱を下げなければならぬ時はそうざらにはないが、その時はもちろん

薬が必要です。ところが飲み薬だって注射だって一個所だけに効くという薬は考えられないでしょう。胃袋だけに効く薬なんていうものはない。身体中に廻るんです。非常にひどい言い方をすれば、厚生省が認めるいわゆる新薬というものは効かない薬なんです。効かない薬というものは、もちろん害もない。それをがぶがぶ飲んでる人があるが、あれは気休めですね。効く薬は害もあるんです。風邪をひけば皆さんは薬を飲むが、一番大事なことは寝ることです。身体が風邪を治すので、薬だけでは治らない。病気の時は寝て安静にすることによって、身体中の細胞が全力をあげてウイルスと戦う、薬というのはそれを応援できるかできないかということ、九分九厘までは自分の身体は自分で治すんです。皆さんはまだ薬害汚染をうけていないと思いますが、病気とか自分の健康は医者管理してくれるかと思っていると、とんでもない大間違いで、自分の健康は自分以外では管理できない。だから病気に罹らないよう注意し、若し病気に罹ったら自分で治す、医者はそのお手伝いをするということでありませう。また薬というのはちよつと飲んでやめたほうがよい。或る菌を殺すということは、よい菌だつてみな殺してしまう。人間は約四百億という細胞でできている、その細胞の一つ一つがみな生きています。その細胞をまた何百億という目にも見えない

生き物で構成されていて、その途方もない総合体が人間というもので、このかわり合いというものは現代医学ではまだ説明されていない。或る部分のことは分かっている、部分の集計が人間ではない。全体と個の相互関係、個と個の相互関係、この秘密は分からない。そのことはフランスのアレキシス・カレルというノーベル賞学者が「人間—この未知なるもの」という本に非常に分かりやすく書いてある。人間というものは、このように生きものの総合体で、その関係というものは説明できないぐらい複雑なものです。だから一部分が分かっていたからといって、全体が分かつたなどと思つたら大間違いで、全体のなりふりが分かつたから人間というもの、の全体が分かつたと思つたら、これまた大間違い、恐らく永久に分からないだろうと思つたのでありますが、現在の医学・生物学・心理学・宗教或は芸術・美学など、すべてのものをひくくめて人間とはこんなものかということが大まかに分かるといふことが大変大事なことである。皆さん方もそれぞれ専門課程にはいると思いますが、専門にはいるその部分は明らかになるが、全体との関係を見失わないように、自分はここの部分のここのをやっているんだということに常に頭の中にないと、大変なことになる。さっきの経済学でも精密になつたからこれで説明できると思つたら大間違い、これはこ

うであるからどういう所へ使えば有用なんだということを考えなければならぬのであります。特に経済の話は前にも言いましたように、人の世の中で一番大変なことは人間というものの勉強が足りないから、いわゆる自然科学というものが人間の能力以上に進み過ぎたという所に一つの大きな問題がある。人の能力以上というとおかしいと思われるかも知れないが、人間の能力というものは何万年殆ど変わっていない。プラトンから二千五百年もたつていない。だからわれわれの方が脳細胞は余計あるのだとか、働きがよいとか、そんなことは絶対でない、同じであります。人間というものはそう変わらない。皆さんだつてそうでしょう。多少利口になつた時は死ぬ時で、今度生まれた赤ん坊は、全くの白地で出て来て、また七十年なり八十年なりの周期で死んで行くんです。これはなかなか変わりようがない。ただし人間自体は変わらないが、人間の知識というものは変わつて行く。それは人間の外に蓄積できるから、皆さんが勉強したものがあつたから、その上に進める。いわゆるサイエンスというものなんです。ところが、人間はちつとも変わらない。知識の集積、それを文明といつてもよいかも知れませんが、科学はどんどん進んで行く。人間が変わらないのと全く関係なく進んで行く。例えば、今の原

子爆弾だって、原子爆弾を扱う人間は大昔に石弓を扱っておった人間と同じ感情をもって、五感で、ものを感じるという人間であることはちつとも変わらない。原子爆弾を扱う人間は金輪際腹を立てなかつたり、かつかするようなことは一切ないという人間ではない。昔弓を持った仲間と喧嘩しておった人間と同じなんだ、怒ることもある。ところが扱う道具が石弓であった時は大したことはなかつたが、原子爆弾を弓矢と同じように扱われたら世界中はいっぺんに吹き飛んでしまう。皆さんご承知のように、今、原子爆弾というものは大変な数である。その他にもたくさん持っているが、ソ連とアメリカだけを対象にしてもソ連は地球上の人類を七回か八回全滅させるだけの原子爆弾を持っている。アメリカはそれよりもっと多く十二回やれる。何を言つとるか、いっぺん殺したら、二回使う必要はない。それを俺の方は七回だ、俺の方は十二回だと、もうその時は人間は一人も居ないじゃないか。その程度のセンスで物を考えている。これはとんでもない大間違いだ。私は非武装論者で、この問題で佐橋というのはよいことを言うけれども、佐橋の非武装論は頭にくるとよくいわれるが、皆さん、人間は五感で判断するので、熱というのは百度の温度は大体分かる。百度のお湯が身体にひつかかって大

千度の温度というと分からない。百度の十倍だと数字になってくる。鉄の工場で溶鉱炉から出てくるのが大体千五百度で、その中に人間が落ちるとシュッと湯気が昇るか昇らないうちに影も形もなくなってしまう。ところが原子爆弾、特に水素爆弾になると何千万度となる。何千万度とはどのくらいか、百度の十万倍だけではないかと。そのセンスが私にいわせれば問題で、実際には分からないということですが、一人どこかで死んだって新聞種になるが、一瞬に一千万人が吹っ飛ぶ、それはもう人間ではなくて数になる。アメリカのニューヨークなりワシントンにソ連が原子爆弾を打ち込んだら、一億人が吹っ飛んで一人も居らなくなる。シェルター、昔ふうにいえば、防空壕、それも途方もない防空壕でもあれば何人かは生き残れるかも知れないが、一億人死んで何人かが生き残れるというような対策が何の値打があるのか。それも水素爆弾が爆発したら、何年かは地上へ出られない。太陽光線を備えたシェルターに何人はいれるか、人間を数としてしか考えないところに大きな問題がある。さきほど言ったように人間は一人一人みんな異なった生きた人間が吹っ飛ぶんだ。善人も悪人も区別なく、聖人も宗教家も全部吹き飛んでしまう。そういう武器を今の政治家は平気で作っている。特にハーマン・カーンなどという馬鹿者は、核を順次に使つて行つ

て一挙に三十億人を殺すのではなくて、百万人を吹っ飛ばせばちよつと考えるだろうというものの方では、危なくて見ておれない。人間というものは、過ちを犯しながらいろいろと苦労して世の中をよくしようというのが悲願だと思ふ。ところがその努力をいっぺんで吹き飛ばすような間違つた考えは、直ちに改めなければならぬと思うのであります。

時間がないのであまり言えませんが、この種のことはたくさんあります。例えば、ケネス・ボールディングの岩波新書にある「二十世紀の意味」だとか、或はエコロジで有名になっているコンラッド・ロレンツの「文明社会における八つの大罪」とかいうのには、必ず原子爆弾を持つたら大変だということを書いてある。同時に人口爆発、人間が飛躍的に増えること、これがまた大変な問題で、今から手を打っておかなければ大変なことになってしまう。それは現在三十四億だけでも三十五年から四十年の間に倍々になるんです。一番怖いのは等比級数的に増えるということです。これはローマ・クラブでも発表しているように、例えば、池の中の蓮が順次繁殖して他の一切の生物が棲めなくなるのに仮に三十日かかるというときに、二十九日目までは半分しかいないんだが、後の一日でいっぱいになるのが等比級数で、世の中が悪くなるのは等比級数的になる。人口の問題、こ

れはいろいろ意見がありますが、今から千九百年前のキリスト誕生の頃は、地球上にはおそらく一〜二億の人が棲んでおったでしょう。千六百年くらいまではまだ十億になっていなかった。ところが今言ったように四十年ごとに大体倍増して、現在の三十五億が七十億になり、次の四十年目には百四十億になるというふうが増え続ければ、あと数百年で地球上は立錐の余地もなくなる。ヒマラヤの頂上までいれても、一人当たり一尺平均ということになり、棲めないのです。人間というものがこのように増えてよいものかどうかということを、人間らしい生活という問題とか合わせて考えなければならぬ。この問題で一番問題となるのは、発展途上国というのがどんどん子供を増やしている。発展途上国は豊かになれない。多少産業が増えても人間が増えたら、それは元の木阿弥で、貧しくはなっても豊かにはならない。人間がこの人口問題をどう考えるか。ご承知のように「人口論」を書いたマルサスだって、マルサスが言った時は当時の人口増加が比率よりも食糧増産比率のほうが圧倒的に高かった。だからマルサスの人口論は一応間違いだつたと思われているかも知れないが、あの考え方はちつとも間違つてない。この問題はいま非常に真剣に考えなければならぬ時に来ている。これは世界ペースで考えなければならぬのに、ど

うして誰も言い出さないのか。人間の幸福との関係においてという問題である。こういうことだつて考えればいくらでも皆さん方が知恵を出せるわけです。時間があればもっと喋りたいが、前に言ったように大体止め処がなくて何を喋ったか分からないが、一応ここで打ち切りまして、あとは質問に応じること、残りの時間を使わせていただきたいと思えます。どうもご静聴有難うございました。(拍手)

(文責在記者)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。